

カブトクラゲ



△ 透明で見つけにくいカブトクラゲ

触るだけで壊れてしまい、とても脆弱(ぜいじゃく)な体をしたこのクラゲは、クシクラゲの仲間、カブトクラゲである。この種は大型で体長10センチになる。

わが国で最も普通にいる種だが、体が透明なので個々で遊泳していると見つけにくい。普段は成群になつており、夏場の海水浴場で、手を入れる隙間がないほど密集することがある。

久保田 信

20



としても使われる。

櫛(くし)のような運動器官で一般的には遊泳する。1枚の櫛は繊毛が融合してできた板状のものである。これが体を縦に8列走り、光がここに当たると干渉して虹色に光る。櫛の列の動きは、頂端にある1個の感覚器でコントロールされ、同調するようになっている。うち4本の櫛の列は短い、他の4本は長くて袖状の突起にも走っている。

櫛のすく下には管があつて、中に生殖巣ができる。この仲間はすべて雌雄同体で、雄であり雌である。互いに合した精子と卵子が受精し、小さなクシクラゲになる。この幼体には袖状の突起も細長い突起もないので、親とは形が随分異なる。

櫛の列のすく下を走る管は、連続して袖状の突起の中にも屈曲しながら伸びている。このような配管は、食べた栄養を体の隅々まで送る仕組みである。(京都大学准教授)

だが、体が透明なので個々で遊泳していると見つけにくい。普段は成群になつており、夏場の海水浴場で、手を入れる隙間がないほど密集することがある。